亀山殿の御池に

（第五十一段）

要旨

亀山殿の池に水を引こうとして、土地の住民に水車を作らせたところ、全く動かなかった。それで宇治川のそばの住民を呼んで、作らせたところ、うまく回ってみごとに水を引くことができた。専門家というのはたいしたものだ。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め〜P三〇・6〈立てりけり。〉	亀山殿の池に大井川の水を引こうとして、土地の住民に言いつけて、水車を作らせた。多くの費用と時間を使って作ったが、全く回らず、いろいろ直しても、結局回らないで、役に立たなかった。
第二	P三〇・7〈さて〉〜P三〇・9〈めでたかりけり。〉	そこで、宇治川のそばの住民を呼んで、作らせたところ、簡単に作って、思うように回って、水をくみ入れることができて、みごとであった。
第三	P三〇・10〈よろづに〉〜終わり	何事でも、専門家は、すばらしいものである。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①亀山殿（かめやまどの）の　御池（みいけ）に　大井川（おほゐがは）の　水（みづ）を　まかせ
格助・体修　格助・場所　格助・体修　格助・対象　サ下二・未

られ　ん　と　て、　大井（おほゐ）の　土民（どみん）に　仰（おほ）せ
尊・未　語り手→上皇　意・終　格助・引用　格助・体修　格助・対象　サ下二・用（尊）語り手→上皇

て、　水車（みづぐるま）を　作（つく）ら　せ　られ　けり。　②多（おほ）く　の　銭（あし）を　給（たま）ひ
接助・単接　格助・対象　ラ四・未　使・未　尊・用　語り手→上皇　過・終　形ク・用　格助・体修　接助・単接

て、　数日（すじつ）に　て　営（いとな）み出（いだ）し　て、　掛（か）け　たり　ける　に、　おほかた　めぐら　ざり　けれ　ば、　とかく　直（なほ）し
格助・対象　八四・用（尊）語り手→上皇　接助・単接　格助・時間　サ四・用　接助・単接　カ下二・用　完・用　過・体　接助・単接　ラ四・未　打・用　過・已　接助・順理　副　サ四・用

たり　ける　に、　おほかた　めぐら　ざり　けれ　ば、　とかく　直（なほ）し
完・用　過・体　接助・単接　ラ四・未　打・用　過・已　接助・順理　副　サ四・用

けれ　ども、　つひに　回（まは）ら　で、　いたづらに　立（た）て　り　けり。
過・已　接助・逆確　副　ラ四・未　接助・打消　形動ナリ・用　タ四・已　存・用　過・終

③さて、　宇治（うぢ）の　里人（さとびと）を　召（め）し　て、　こしらへ
接　格助・体修　格助・対象　サ四・用（尊）語り手→上皇　接助・単接　八下二・未

させ　られ　けれ　ば、　やすらかに　結（ゆ）ひ　て　参（まゐ）らせ
使・未　尊・用　語り手→上皇　過・已　接助・順偶　形動ナリ・用　八四・用　接助・単接　サ下二・用（謙）語り手→上皇

たり　ける　が、　思（おも）ふ　やうに　めぐり　て、　水（みづ）を　くみ入（い）るる　こ
完・用　過・体　格助・主格　八四・体　比・用　ラ四・用　接助・単接　格助・対象　ラ下二・体

と　めでたかり　けり。
形ク・用　過・終

④よろづに、　その　道（みち）を　知（し）れ　る　者（もの）は、　やんごとなき
副　代　格助・体修　格助・対象　ラ四・已　存・体　係助・区別　形ク・体

①亀山殿のお池に、大井川の水をお引き入れになろうということで、大井の土地の住民にご命じになって、水車を作らせなさった。②多くの金銭をお与えになり、幾日もかかって作り上げて、（大井川に）掛けたところが、全然回らないので、あれこれ手直ししてみたけれども、結局、回らないで、（水車は）何の役にも立たないで立っていた。

③そこで、宇治川のそばの住民をお呼びになって、（水車を）作らせなさったところ、やすやすと組み立ててさし上げたものが、思うように回って、水をくみ入れることは見事であった。

④何事につけても、その道の専門家は、大したものである。

ものなり。
断・終

学習活動のポイント

■導入

学習活動のポイント

❶『徒然草』や作者兼好についての知識を発表する。[知技(1)ア・(2)イ]

❶三大随筆の作品名と作者を確認する。

「枕草子」清少納言　「方丈記」鴨長明　「徒然草」兼好

兼好については、出家遁世していることを出家遁世の意味も含めて、押さえる。著名な歌人であったこともでてきたら、確認しておく。

【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

・古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

■展開

学習活動のポイント

❶古語の意味・用法、文法事項に注意して現代語訳する。[知技(1)ウ・(2)ウエ]　→**「言葉と表現」1**

❷二つの場面と作者の考察について、内容をまとめて理解する。[知技(1)エ][思判表B(1)ア]　→**「学習のポイント」1**

❸「その道を知れる者」とはどのような人のことを言うのか、話し合う。[思判表B(1)イウ]　→**「学習のポイント」2**

❹「その道を知れる者」にふさわしい人を、身近にいる人の中から選び、どのような点で「道を知れる」と言えるのか、発表させる。[思判表B(1)オ][主態]　→**「言語活動」1**

❶用言、特に形容詞、形容動詞をチェックし、その意味を文脈に応じて正確に理解する。「いたづらなり」「やすらかなり」「めでたし」「やんごとなし」などの理解がポイントとなる。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

・時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❷二つの場面は次のようになる。

「大井の土民」の場面（P三〇・2〜6）をまとめさせる。

亀山殿の池に水をくみ入れるための水車を土地の住民に作らせた。たくさんの費用と日数をかけて作ったが、うまく回らず、あれこれ直しても回らなかった。

「宇治の里人」の場面（P三〇・7〜11）をまとめさせる。

宇治川のそばの住民に作らせたところ、簡単に作って、しかも思うように回って、水をくみ入れることができた。

「数日に営み出して」に対して「やすらかに結ひて」

「おほかためぐらざれば」に対して「思ふやうにめぐりて」

このような対比を板書して、確認させると分かりやすい。次に作者の考察を考える。「やんごとなき」（P三〇・1）の意味を捉え、作者が宇治の里人の技に賛辞を与えていることを理解させる。

【評価】文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、現代語訳により、確認する。

・文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、「大井」の人と「宇治」の人との違いをノートに表形式でまとめさせ、対応する項目がきちんと整理されているか、確認する。

❸ひとりひとりの名人のイメージをまとめ、話し合う。人によっては、だれにもできないことをするのが名人だと考えるかもしれないし、だれにでもできそうなことでもより容易にするのが名人だと考るかもしれない。いろいろな意見をぶつけることで、名人についての考えを深められるとよい。また、そのようなことから、あるものごとについてよく知っていることが大切だということも理解できる。なにごとにもちょっとした「こつ」のようなものがあり、それを知っているか、そうでないかが、ものごとがうまくいくかどうかを大きく左右するものである。専門家がやると簡単にできることが、そうではない人にとってはどうやってもうまくいかない。そのあたりの事情がうまく書き込まれている段であるので、読み味わいたい。最終的には社会で働くことの意義にまで考えが及ぶとなおよいだろう。

【評価】「道を知れる人」について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、最後の部分を適切に現代語訳し、十分に理解しているか、自分の言葉で言い換えさせたり、他の例を挙げさせたりして、確認する。

・文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価しているか、対照的な二組の人々を登場させていることについて、発言を求め、自分の言葉で説明できるか、確認する。

❹スポーツ選手や何かの作品（文章でも映像でも）の登場人物でもよい。❸で考えたことに当てはまる人を幅広く考えてみる。

【評価】作者が名人の技術をどのように評価しているかについて、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めているか、各自の意見を発表させて確認する。

・進んで「徒然草」に表れた作者のものの見方、感じ方を捉え、文語助動詞の種類と用法を理解し、学習課題に沿って、作者の主張を読み取り、自分の身近にいる人から「その道を知れる者」を選んでその理由とともに発表しようとしているか、分析する。

指導上の注意点と発問例

●三〇ページ

問 (1)**「大井の土民に仰せて」（2行目）の「仰せ」の基本的な意味を述べよ。**
(2)**文法的に説明し、ここでの意味を書け。**

答 (1)①「おっしゃる」意で「言ふ」の尊敬語。「らる」「給ひ」を伴い「仰せらる」「仰せ給ふ」となって、敬意の高い語となる。②「お命じになる」意で、「命ず」の尊敬語。(2)サ行下二段活用の動詞「仰す」の連用形。「命ず」の尊敬語で「ご命令になる」「言い付けなさる」の意。

問 [易](1)**「銭を給ひ」（3行目）の「銭」とは何のことか。**
[中](2)**「給ひ」の用法、意味を答えよ。**

答 (1)お金（金銭、ぜに、あし）(2)（用法）ハ行四段活用の動詞「給ふ」の連用形。（意味）「与ふ」の尊敬語で「お与えになる」の意。

問 **「数日に営み出だして」（3行目）とは、①誰が、②どうしたというのか。**

答 ①大井の土地の者。②水車を造り上げた。

問 **「おほかた」（4行目）の意味用法を説明せよ。**

答 叙述（陳述）の副詞。下に否定語（打消語）を伴って「全然」「まるっきり」「いっこうに」「少しも」の意となり、ここでは「ざり」（助動詞・打消・連用）と呼応している。

問 **大井の土民はどのように水車を作り、出来上がったものはどのような様子であったか。**

答 ・何日もかけて作った。・全く回らなかった。

補 数日に営み出だして」「おほかためぐらざりければ」が該当部分である。

問 **「いたづらに」（5行目）を文法的に説明せよ。**

答 形容動詞「いたづらなり」（徒らなり）の連用形。

問 ◉**「いたづらに」（5行目）とは、どのような様子か。**

答 せっかく作った水車なのに、全く回らない役に立たない様子。期待はずれの失望感が含まれる言い方である。

補 回らなかった水車をあれこれ直したが、結局回らなかったという過程を踏まえ、この語に込められている気持ちにも考え至らせるとよい。

問 **なぜ「宇治の里人」が召されたのか。**

答 宇治川は昔から水車で有名であり、その土地の人なら水車がうまく作れると思われたから。

問 **「こしらへさせられければ」（7行目）と同**

語句の研究

●三〇ページ

2亀山殿　鎌倉時代の院の御所。嵯峨殿ともいう。建長七（一二五五）年に後嵯峨上皇の御所として造営され、子の亀山院や、孫の後宇多院も御所として用いている。現在の天竜寺の地（京都市右京区嵯峨）にあった。大堰川に南面し、西北に小倉山を望む。亀山とはこの山の東南端の丘の名である。

2大井川　大堰川。保津川が嵐山の麓を流れる間の名。その下流は桂川という。亀岡市方面から流れてくる保津川に清滝川が合流する所から嵐山の麓の渡月橋までの間を、「大井川」と呼ぶ。渡月橋より下流を桂川と言う。

2まかせられん　お引き入れになろう。「まかす」は池などに水を引く意。「られ」は尊敬の意。亀山殿の寝殿の前の池に大井川から水を引こうとしたのである。この敬語については後嵯峨上皇に対するものと考えられるが「古今著聞集」の亀山殿造営の項に、「大井の山荘を仙宮にうつしておはします。造営のことは、権大納言実雄卿の沙汰とぞ聞こえし。」とあり、御所造営の責

じ内容の語句を、「大井の土民」についての叙述から抜き出せ。

答　水車を作らせられけり

問　[易](1)**「参らせたりけるが」（8行目）とは、誰が、どうしたのか。**
[中](2)**同じ内容の語句を「大井の土民」についての叙述から抜き出せ。**

答　(1)宇治の里人が、水車を組み立てて差し上げた。(2)掛けたりける。

問　**大井の土民の作った水車に対して、宇治の里人の作った水車はどのような様子であったか。**

答　・やすやすと作った。・期待どおりに回った。

補　「思ふやうに」には、「いたづらに」に対して、期待どおりというニュアンスが含まれる。

問　(1)**「水をくみ入るることめでたかりけり」（9行目）の「めでたし」とは、どのような意味か。**
(2)**対応する語句を、「大井の土民」についての叙述から抜き出せ。**

答　(1)見事である。すばらしい。(2)つひに回らで、いたづらに立てりけり

問　**「めでたかりける。」に込められた気持ちを考えよ。**

答　見事なものだという賞賛する気持ち。

補　「めでたし」は「めづ」（ほめる）と「いたし」（甚だしい）の複合した形と言われている。そこから、この語に込められた気持ちを考える。

問　**次の部分の主語を後の語句から選べ。**
(1)多くの銭を給ひて
(2)数日に営み出だして、掛けたりけるに
(3)おほかためぐらざりければ
(4)とかく直しけれども
(5)つひに回らで、いたづらに立てりけり
ア　水車造りを命じた人　イ　大井の土民　ウ　水車

答　(1)ア　(2)イ　(3)ウ　(4)イ　(5)ウ

補　本文の文脈は、主語が次々と変わっているので、正確に読み取る必要がある。

問　**この段の主題を述べている分を抜き出せ。**

答　よろづに、その道を知れる者は、やんごとなきものなり。

任者だった権大納言高階実雄に対するものという説もある。

2土民　土地の住民。亀山殿に近い大井川沿いに住んでいた人々。

2仰せて　「仰す」は、ここでは、「言いつける、命じる」の意。

2水車　ここでは水流で回転し揚水する水車のこと。平安時代前期より灌漑のために用いられた。

3銭を給ひて　足のあるごとく世間に流通することから、貨幣の異名を「あし」と言った。「給ふ」は「与ふ、授く」の尊敬語。このままだと、主語は後嵯峨上皇と考えられ、次の部分から主語が変わるが、「給はりて」と混用されているとの説もあり、そうすると「給はる」は「受く」「もらふ」の謙譲語なのでこの一文は主語が大井の土民で統一されている。

3数日　「すじつ」と読む。現代の数日よりもやや長い日数を指す。「何日も」の意。

3掛けたりけるに　「掛く」は「仕掛ける、取り付ける」の意。水車を大井川に取り付けたのである。

4おほかた　下に打ち消しの表現を伴って「全然」「少しも」の意味を表す。中世に始

まった語法と言われ、中古では「一般に、おおよそ」の意であるので、注意する。

4めぐらざりければ　「めぐる」は「回転する」の意の自動詞で、ここからこの水車が川の流れによる自転式のものであったと考えられている。水車は古くは人力や牛馬の力による他動式のもので、自転式の水車は当時、新技術であったとされる。そうすると、この話は分かりやすい。

5回らで　回らないで。「で」は活用語の未然形に付く接続助詞で、「…ないで」と打消接続の意で用いられる。

5いたづらに　「いたづらなり」はもともと努力に見合った結果が得られない、期待はずれの様子を表す語で、ここは本来の意味で使われている。子供の悪ふざけを指すようになるのは、中世以後の用法である。

7宇治　宇治川沿いの地。現在の京都府宇治市付近。宇治川は昔から水車で有名であった。この付近の宇治川は急流で、それを利用して数多くの水車が作られた。また「宇治の川瀬の水車」は風物詩として「梁塵秘抄」などでうたわれるなど、水車の名所でもあった。「宇治の里人」は、宇治の里の住人のことで、急流に臨み水車の技術に秀でた者たちとして、先の「大井の土民」と対照的に描かれている。

8結ひて　組み立てて。前文の「こしらふ」は「工夫して作る」意である。

8参らせたりけるが　「参らす」は「差し上げる、献上する」の意の謙譲語。「が」は下の「めぐりて」「くみ入るる」の主格を示す。「差し上げた（水車）が」ということ。

10その道　その専門。「道」は、ここでは、「技芸や技術の奥義、こつ」というようなもの。その人だけの専門分野ということである。

10やんごとなきもの　放っておけないくらい大切なものということで、第一級のもの、最高のものに用いる語である。重大である。はなはだ尊い。なみなみではない。

鑑賞

いわゆる名人談の一つである。ただし、この段は、名人とは言えない「大井の土民」と名人である「宇治の里人」とを対照的に描いているので、他の名人談よりも名人とはどのようなものかが考えやすくなっている。そもそも「大井の土民」という言い方と「宇治の里人」という言い方とには微妙な差があるように感じる。「土民」という言い方がおとしめた表現であるかどうかは定かではないし、当時の表現と現在の感じ方の間には異なる面もあるだろうが、「土民」よりも「里人」という言い方のほうが、穏当な感じがすることは否めないだろう。しかし、それは技術に対する賞賛とも言うべきもので、決してその人たちそのものに向けられるものではないであろう。そのような作者の関心の在り方については慎重に読み取らせたい。

さて、この章段では、まず初めに、「大井の土民」の水車作りについて述べられる。費用も日数も多くかかったのに、全く回らない。その上、あれこれ直してもかいがない。最終的にその水車は「いたづらに」立っていたというのである。この「いたづら」という語がある意味で辛辣である。「役立たず」というのである。それに対して、「宇治の里人」はやすやすと作って、考えたとおりに回ったと言う。対応する部分を板書しながら、その違いをしっかりと把握させたい。どこがどのようにうまくいかなかったのか、どのような違いがあるのかなどということはいっさい書かれない。おそらく「名人、専門家」というものに対する作者の一般的な解説の意味合いも強いのであろう。ふつうの人には説明しても分かりづらいものの、ちょっとした「こつ」が物事をスムースに運ぶことを象徴的に語ろうとしているのではないだろうか。「宇治の里人」の水車に対する「めでたかりけり」という評価や専門家に対する「やんごとなきものなり」という評価はそのちょっとした「こつ」への最大級の賛辞となっている。作者自身もこのようなちょっとした「こつ」へのこだわりを持っていたのであろう。すごいことではない、教えてもらえれば何だというくらいのことかもしれないが、それを知ることはたいへんなことなのである。「徒然草」の他の名人談を読んでも、なんとなくそのような作者の思いが読み取れるような気がする。

この水車の技術については、従来、水車は人力や牛馬の力による他動式であったのが、このころ、自動式のものが生まれ、その新技術がポイントになっているという説がある。なるほどそのような説明を加えると納得がいくが、先にも述べたように、具体的な事実のみが問題とされているわけではないのであろう。そのような具体的な事実がなくとも、ちょっとしたことで水車は回ったり、回らなかったりすることについては、似たような経験を含めればだれしも経験していることなのである。それを思い起こしつつ、物事をスムースに運ばせる「こつ」の意義について考えさせればよいのではないだろうか。そして、まだ一年生ではあるが、社会に出たあとで、どのようなことが大切にされるのか、意識付けができれば、それにこしたことはないであろう。